死定席の誤算

南風　こまち

　出町柳駅近くの交番から電話が飛び込んできたのはある蒸し暑い夜、俺が遅めの夕食にあんドーナツを二つほど腹に収めた頃だった。パトカーを駆り、俺は北条警部と共に出町柳駅に急行した。
「北条警部、甘木刑事、お疲れ様です」
　駅前で巡査と落ち合う。既に救急車が警告灯を光らせて周囲を赤く染めていた。
「ご苦労様です。現場の状況は？」
「折り返し作業をしていた電車の車内で男性の死体が見つかりました。車掌が最初寝ているものと思って起こそうとしたところ、様子がおかしく救急車と警察を呼んだそうです」
　北条警部はのしのしと階段を降りながら、巡査の報告に耳を傾ける。階段を降りて改札口までいくと、青い顔をした駅員が現場に案内してくれた。ホームに通されると、赤と黄色の京阪電車に規制線が張られている。
「こっちです」
　駅員と巡査の案内に従い、車内に入る。２号車に通されたが、車両中央付近の席に一人だけ、大人しく座ったまま微動だにしない後頭部が見えた。
「なるほど、確かに死んでいますな」
　被害者は初老の痩せた男で、薄水色のワイシャツを着ている。目立った外傷は見られず、目を閉じて背もたれに体を預けている。そのため、ぱっと見では眠っているように見える。
「殺しですかね？」
「分かりませんな、外見だけでは判断が難しいです」
　俺の疑問を警部はさらりと流す。
「第一発見者は？」
「わ、私です。車掌の井原と申します」
　さっき案内してくれた駅員がおずおずと手を挙げる。どうやら駅員ではなく事件が起きた列車の車掌だったようだ。
「ええと、井原車掌。私は京都府警警部の北条、こちらは部下で刑事の甘木です。いくつか質問をさせていただきます」
　井原車掌は気味悪そうに遺体を一瞥して、こくこくと頷いた。俺は警部と車掌のやり取りに耳を傾けながら、メモを取っていく。
「では、被害者を発見した時の状況を教えてください」
「はい。この列車は出町柳行きのライナーとして２０時ちょうどに淀屋橋を出発し、今日も定刻通り２０時５６分に当駅に到着しました。そこから２１時１１分発の特急として折り返しますので、そのための車内整備を行います。車内にお客様が残っていては作業ができませんので、確認のために車内を巡回していたところ……」
　井原車掌はまたちらりと被害者の方を見て、気味悪そうに生唾を飲み込んだ。
「被害者を発見した、と。災難でしたね。折り返し作業とは、具体的には何を？」
「座席の向きを変えるんです。この車両は座席が進行方向を向くように設計されているので、終点に着くと座席の方向転換を行います。乗客が座っていますと作業ができませんので、その確認も兼ねての車内巡回でした」
　警部に続いて、俺は次の質問をした。
「なるほど。ところで、こちらの乗客はどこから乗車したか分かりますか？」
「座席照会予約では淀屋橋から当駅まで、全区間乗車することになっていたようです」
　聞き慣れない単語を前に、俺はもう少し突っ込んだ質

問をする。
「座席照会？　というと、この車両は指定席ということですか？」
「はい。この列車は全席指定のライナーとして運行されます。ですので、データベースにアクセスしてお客様が座っていらっしゃる座席番号――この方の場合は2号車14番D席ですね――それを照会すれば予約区間が判明します」
北条警部が二重あごを指でなぞって考え込んでいると、鑑識が到着した。遺体を様々な角度から写真に収めると、手回り品を改め始める。程なくして収穫があったようで、一人が俺たちのところに駆け寄ってきた。
「警部、財布から名刺とライナー券が見つかりました。名刺は枚数から本人の物と思われます」
北条警部は名刺を受け取り、読み上げる。
「大阪市役所市民課、松浦陽、ね……」
家族と市役所に連絡を取る手配を済ませた頃には、鑑識が遺体を運び出そうとしていた。遺体が座席から浮き上がる様子をじっと見ていると、座面に何かがきらりと光ったような気がした。
「警部、ちょっと」
俺は鑑識の動きを一旦止めさせ、警部を松浦さんが座っていた席に連れてくる。
「甘木刑事、どうしました？」
俺は返事をする余裕すら惜しく、じっと黒いモケットの座面に目を凝らす。
「……あった、警部！　針です！」
警部は俺の言葉に少し目を見開き、背後から顔を近付ける。俺は針を指差す。とても細い針が、黒いモケットのやや左よりの部分から垂直に顔を覗かせている。注意して目を凝らさないと気付くことは難しいだろう。
「よく見つけましたね、甘木刑事。鑑識に回しましょう。井原さん、普段は座席にこのような針が刺さっていることはありますか？」
「とんでもない、そんなことありえません」
車掌は即座に首を横に振り、きっぱりと否定した。針そのものにも見覚えが無いという。
「ところで、他の乗客は？」
警部が質問を再開すると、車掌はバツが悪そうに答えた。
「それが、私が車内巡回をするのは乗客の降車完了を確認するために行うものだったので……つまり、全員降りてしまいました。私が発見した時には、他の乗客の姿は車内で見かけませんでした」
「ふむ、乗客の特定はできませんか？」
「ネット予約をした人は分かると思います。ただ、駅の発券機からライナー券を購入した場合には特定できないかもしれません。無記名式ＩＣカードでも購入できますので」
俺たちは車掌に頼んで、発券機に案内してもらった。発車直近5列車のきっぷのみ購入できるというもので、主要駅に設置されているという。京阪の方で照会してもらい、分かる範囲でライナーの乗客名簿を作ってもらうことになった。手配をしていると、鑑識が警部のもとに駆け寄ってきた。
「警部、遺体の収容を完了しました。これから司法解剖に回します。車内の実況見分も引き続き行います」
「実況見分は車内だけですか？」
「はい、今のところは」
「分かりました、ご苦労様です」
去っていく鑑識と入れ違いに、今度は井原車掌が近寄ってきた。
「あの、列車はいつ頃に車庫に回送すればいいでしょうか？」
「もう動かしてもらって結構ですよ。ですが、実況見分がまだ完了していないので、お客を乗せての運転は行わないでください」
しばらくして、赤と黄の京阪電車は車庫へと走り去っていった。俺たちもいったん引き上げることになった。
二日後、俺は北条警部と共に淀屋橋駅で京阪の方に話を伺うことになった。せっかくだから出町柳からライナーに乗ることにした。通勤ラッシュの時間帯なだけあって混雑しており、警部と二人掛けの席を押さえられたのは僥倖だった。券売機でライナー券を買う時に、すぐ出せるＩＣカードを使ってしまった。
「警部、買ってきましたよ」
「どうもありがとう。では乗りましょうか」
ホームに向かうと、既に赤と黄の京阪電車が俺たちを待っていた。車内はサラリーマンが多く、空席は数えるほどしかなかった。
「警部、淀屋橋に着くまでに、判明したことを報告します」
俺はそう言ってパソコンを置こうとテーブルを探したが、前の座席から引き出すテーブルも肘掛に内蔵するテーブルも無い。仕方なく膝の上でパソコンを立ち上げる。
「まず、松浦さんの死因はトリカブト系毒物による中毒死でした。毒物は直接血液中に投与されたものだと判明しました。胃の中から毒物は検出されなかったので確実です」

「猛毒ですな。出所は？」
ドアが閉まり、電車が走り出す。淀屋橋までは小一時間ほどだ。
「それはまだ判明していません。ただ、座面に刺さっていた針から微量のトリカブト系毒物の成分、そしてトリカブトの葉の繊維が検出されました。犯人はトリカブトの葉を何らかの方法で入手し、それをすり潰し針にまぶすなどして毒針を作り、それを仕掛けたのでしょう。また、遺体の左内腿に針で刺されたような痕が残っており、毒物による殺人だと断定するに十分な証拠となりました」
警部はパソコンの画面をのぞき込む。写真の中の毒針はとても細く、座面に仕掛けることくらい簡単そうだ。
「被害者の死亡推定時刻は？」
「昨夜２０時頃、誤差は前後３０分だそうです。松浦さんが乗車したライナーが淀屋橋駅を発車する頃ですね。犯人はライナー発車前に座席に毒針を仕掛けたものと考えられます」
「つまり、松浦さんは淀屋橋からライナーに乗車し、毒針に気付かずに着席、そのまま中毒死したということですな」
ひととおり資料に目を通し終えた北条警部は、ぐりぐりと眉間をもみながら言った。
「ですが警部、殺人だとしたら厄介ですよ」
ため息交じりな俺の言葉に北条警部はむっつりと頷くだけだった。というのも、松浦さんの家族関係や職場関係は極めて平凡なものだったのだ。誰かに恨みを抱かれる行いも無く、動機の面から容疑者を絞り込む方策は早くも行き詰まりの様相を呈していた。
「無差別殺人ですかね？　それなら被害者が誰であろうと同じことですし」
「いえ。無差別殺人ならせっかく手に入れたトリカブトでもっとたくさんの毒針を作り、より大勢を殺害するでしょう」
北条警部は冷淡な口調で、やけくそな俺の意見を封殺する。
「京阪から出してもらった乗客名簿はどうでしたか？」
「チェックしましたが、松浦さんと関係のある名前は一つもありませんでした。もっとも、京阪の方が話していた通り交通系ＩＣで乗車した人も数名いて、その人物の詳細は特定できていませんけど……よりによって、それが厄介でして」
七条を発車したライナーは地上に出て、少し羨ましいくらい快調に市街地を飛ばす。
「どのように厄介なのですか？」
「実は、松浦さんが着席していた2号車１４番Ｄ席の隣、１４番Ｃ席にも乗客がいました。乗車区間は京橋から七条です。被害者の隣ということで是非話を聞きたいのですが、無記名式ＩＣカードでライナー券を購入していて、人物の特定ができないんです」
北条警部は渋い顔をして、二重あごをぽりぽりと掻いた。
「１４番Ｃ席の発券場所はどこです？」
「京橋駅の発券機です。発券時刻は１９時４７分でした」
「駅の防犯カメラの映像を洗いましょう、購入者の顔が映っているかもしれません」
警部はそれだけ言って、鞄の中から何かを取り出した。
「必ず突破口はあります。甘木刑事、粘り強くやりましょう」
缶コーヒーとあんドーナツを受け取りながら、俺は頷いた。
終点の淀屋橋でライナーを降りる。駅窓口に向かうと助役が出てきて、事務室に通された。簡単に事件の内容を説明し、ひととおり質問をするも新事実は出てこない。
「何か、現場のライナー列車で気になることなどはありましたか？」
助役は少し考えこみ、ぱんと手を叩いた。
「当駅でライナーに向けた折り返し作業をしていたら、１４番Ｄ席に忘れ物がありました」
俺は俄然色めき立ったが、北条警部は興奮することもなく忘れ物を見せるよう頼んだ。
助役が持ってきたのは黒いショルダーバッグだった。男女兼用といったデザインで、持ち主を特定するようなものは何も入っていなかった。判明した新事実もそれだけで、俺は少し落胆しながら事務室を後にした。
しかし、夕方に風向きが変わった。北条警部が言う通り、事件当日朝に松浦さんの隣席のライナー券を購入する客の姿が京橋駅の防犯カメラに捉えられていた。映像をさらに調べると、同じ客が数日前に定期券の更新をしている映像が見つかったのだ。時刻と券売機の履歴を照らし合わせたところ、事件当日の１４番Ｃ席のきっぷを買ったのは錦川正美という女性だと特定できた。
「錦川正美の職業ですが、この劇団六秋ってところの劇団員のようですね」
名前をネットで調べたらすぐに出てきた。劇団は京橋に本拠地を置いており、早速連絡を取って彼女に会いに行くことになった。
京橋駅に引き返す。駅から数分歩いた雑居ビルの地下に練習スタジオがあると教えられ、言われた通りに地下へと降りる。すると、ドアの向こうから甲高い声が聞こ

えてきた。どうやら誰かが怒鳴り散らしているようだ。インターホンを押しても怒声で遮られるのか返事が無い。ドアノブをひねると開錠されていたためドアを開ける。
「……やから、あんたは何でそないドジなんよ！　こないだの東京公演の演技でもとちるし、おまけにあんたのせいで警察まで来るようになったやん！　ええ？　黙っとらんと何か返事せえや！」
スタジオはダンス練習場のようになっており、その真ん中にがみがみと怒鳴る老婆と、神妙に頭を下げている女性がいる。
ごほん、と北条警部が咳払いをして二人の注意をひく。
「失礼。インターホンは鳴らしたのですが、返事が無かったものですから。先程連絡した京都府警の北条です」
そう言って警察手帳を見せると、二人は後味が悪そうな表情をしながら近寄ってきた。
「錦川正美さんにお会いしたいのですが」
「錦川は彼女です。何かしたんですか？」
厚化粧と茶色い巻き毛がけばけばしい老婆が、さっきまで叱責していた女性を俺たちにずいと押し出す。
「あなたは？」
俺は老婆に……いや、違う。老婆の格好をしているだけだ。お芝居のためだろう。とにかく、目の前の女性に自己紹介を求めた。
「水間くるみ、劇団六秋の責任者です。で、錦川が何か？」
俺は事件の概要を二人に話した。
「なので、被害者の隣の席のライナー券を利用した錦川さんのお話を伺いたく来訪した次第です」
説明を終えると、二人は困惑したように顔を見合わせた。錦川さんが口を開く。
「あの、刑事さん。私はライナー券を購入しただけで、着席はしていません。利用したのはこちらの水間さんです」
「ええ。錦川に出町柳の衣装屋に荷物を受け取りに行かせた帰り、ついでにライナー券の購入を頼んで買ってきてもらったんです。夜の8時前くらいだったと思います」
それくらい自分で買えばいいだろうに。インターネットでも予約できるのだから。
「出町柳から京橋まで京阪特急で出て、京橋駅でライナー券を買ってきてもらったと、なるほど。では水間さん、一昨日のライナーでは被害者の隣に座っていたそうですが、何か変わったことはありませんでしたか？」
俺の質問に水間さんは少し逡巡する。
「さあ？　乗った時、隣に男の人が座っていて、眠っているように見えました。私は七条で降りましたが、何も気付きませんでした」
「お二方は松浦さんと面識は？」
「あるわけないでしょう」
老婆に扮した責任者はつっけんどんに言った。錦川さんも首を横に振る。
「錦川さん。あなたが代理で購入したライナー券は2号車14番C席のものでしたが、それは何か目的があってその席を指定購入したものなのですか？」
北条警部が質問をぶつける。錦川さんはまた首を横に振った。
「水間さんはいつも通路側の席を選んで乗車するので、買う際はいつもB席かC席です。意図しているのはそれくらいで、号車や列の番号は偶然です」
「舞台でもないのに窓の外からじろじろ見られるなんて、嫌じゃないですか」
水間さんは付け足し、俺は北条警部の方をちらりと見る。警部はなぞっていた二重あごから手を離し、別方面から質問をぶつける。
「少し答えにくいかもしれませんが、先程の叱責は何だったのですか？　かなりの大声でいささか驚きましたな」
水間さんは怒りからか羞恥からか顔を赤くし、錦川さんは暗く顔を俯けた。
「最近、錦川は仕事でミスが多くて。演技だけでなく、それ以外の面でも。つい堪忍袋の緒が切れてしまい、お見苦しい場面をお見せしました」
俺は胡散臭い眼差しを堪えながらメモを取る。衣装やライナー券を買いに行かせるなんて、劇団員の役目ではないだろう。単に水間が錦川をこき使った結果、演劇にも影響しているのではないのだろうか。
質問も尽きたためお暇することにした。階段を上っていると、下ってくる二人組の女性とすれ違った。
「すみません、少しいいですかな？」
北条警部がいきなり二人に声をかけた。不審げな顔をする二人に警察手帳を見せると、若い女性二人組は緊張した面持ちになった。
「なに、大したことではありません。実は、ある事件の目撃証言を集めに水間さんと錦川さんにお会いしたのですが、水間さんはおっかない方ですねぇ。普段からあのような感じなのですか？」
警部が柔和な笑みを浮かべると、二人は少し顔の緊張をほどいてどちらからともなく話し始めた。
「うーん、錦川さんにはなぜか当たりがきついですよね。ねえ、真美？」
「そうそう、マサ姉かわいそう。八つ当たりなんていつものことやし。ほら、先週の東京公演の帰りの新幹線もひどかったやろ」

「ああ、あれ？　新幹線の座席を向かい合わせにせえって水間さんが言うてマサ姉は言う通りにしただけやのに、コロナ対策やからって車掌さんに怒られて席を戻したら水間さんにもお小言を食らって。理不尽よね、あれ」
「でもマサ姉、ここ最近どうも心ここにあらずって感じなんよね。前まで彼氏自慢にはいの一番に食いつきよったのに、最近は少しも口にせん」
「別れたんとちゃう？　彼氏といえば、水間さん、また男作ったらしいで」
「ほんま？　これで４人目くらいやない？」
「ど、どうもありがとう。とても参考になりました」
北条警部は珍しく強引に話に割り込んでお礼を言い、のっしのっしと階段を上がる。俺も後を追い、やがて京橋駅に戻ってきた。既に１９時半を回り、夜のとばりが下りている。
「とりあえず、錦川さんと水間さんが松浦さんと面識が無かったのかどうかは洗い直さないといけませんね」
俺はぼやきながら警部の後に続いて改札を抜ける。しかし警部は出町柳方面ではなく、淀屋橋方面のホームに向かって歩き出した。
「警部、どこ行くんですか？」
「甘木刑事、せっかくなので淀屋橋からライナーに乗って帰りましょう。何か発見があるかもしれません」
俺は警部の言葉に賛同し、ホームに向かう。首尾よく４４分発の特急を捕まえることができた。終点の淀屋橋に着いて列車を降りると、折り返し作業が始まった。事件と同じ、２０時発のライナーに使われるようだ。
俺は警部と共に折り返し作業を見てみることにした。車掌が車内を巡回し、居残っている乗客や忘れ物の有無を確認する。異常は認められなかったようで、ドアが閉まり、バタバタと背もたれの向きが変わる。
「なるほど……」
北条警部がぽつりとつぶやき、二重あごを指でなぞる。
「どうかしましたか、警部？」
「甘木刑事、ライナー券を買ってきてください。車内で説明します」
「説明って、何をです？」
俺の問いに北条警部は目尻を下げながらこう返した。
「犯人が錦川正美だということを、です」
２０時ちょうど、ライナーは赤と黄の車体を震わせ、出町柳に向けて走り出した。
「警部、錦川正美が犯人というのはどういう意味なんですか？」
「そのままの意味ですよ、甘木刑事。彼女が松浦さんを殺害した。正確には、殺害してしまったというべきかもしれませんな、彼女は松浦さんを狙っていたのではありませんから」
俺は二、三度瞬きをした。
「話がよく飲み込めないのですが……」
「松浦さんに対する動機を調べて行き詰まるのも当然です。彼女が狙っていたのは水間くるみの命ですからね。甘木刑事も見たでしょう、水間さんの彼女に対する態度を。あれでは反感を買われても当然です。その反感を実行に移すのは愚かとしか言えませんがな」
「それなら、なぜ水間さんの命ではなく松浦さんの命を奪うことになったんですか？」
警部は焦らすように鞄を開け、中から缶コーヒーとあんドーナツを取り出す。
「甘いものは脳みそにいいですよ、甘木刑事」
朝と同じ組み合わせだったが、空腹を覚えた俺はありがたく受け取る。パンにぱくつきながら話を再開させる。
「錦川さんは松浦さんと面識が無かった、というのは嘘だったんですか？」
「いえ、恐らく本当でしょう。彼女もさぞ動揺したと思いますよ。水間さんに向けたはずの罠が、全く見ず知らずの人間に牙をむいたのですから」
「罠？」
俺は缶コーヒーのプルタブを開けながら警部の言葉を反芻する。
「彼女が罠、つまりトリックを思いついたきっかけになったのは、恐らく東京公演の帰りの新幹線での出来事でしょう」
「二人組が話していましたね、座席の向きを変える変えないでとばっちりを食らったとか」
「それですよ。甘木刑事、新幹線の座席の向きはどうやって変えますか？」
北条警部はじっと俺の方を見る。俺はパンとコーヒーをテーブルに置こうとしたが、そうだ、この列車にはテーブルが無いんだった。やむなく手に持ったまま身振りを交える。
「どうやってって、座席下のペダルを踏んだらロックが外れて、座席全体がぐるりと回るようになりますよね」
「その通りです。彼女はそれをトリックに組み込んだんです」
列車は早くもさっきまでいた京橋駅を発車する。車窓が地下の闇から夜景に変わる。
「順を追って説明しましょう。まず、錦川さんには水間さんを指定された席に座らせる必要がありました。水間さんが座る予定の席に前もって毒針を仕掛け、彼女を殺

害しようと目論んだわけです。それを実行するのに、水間さんが錦川さんにライナー券を日常的に買わせていたことは好都合でした。錦川さんは水間さんが座る席を簡単に知ることができますからね」

俺は頷き、質問を挟む。

「毒針を仕掛けたのはいつなんですか？」

「水間さんは錦川さんに出町柳までお使いに行かせましたね。その帰りの電車の中です。さっき、我々が京橋から乗った特急、つまり淀屋橋で折り返す前のこのライナーに錦川さんは乗車していました。出町柳は始発駅なので、錦川さんには簡単に水間さんが折り返して座る席を陣取ることができたはずです。そして、京橋駅に着くまでに座席に毒針を仕掛けたのですよ」

「そんな無茶な、京橋から淀屋橋の間で誰かがその席に座ったら死んでしまうじゃないですか」

「その通りです。そこで彼女は対策をしました。席にわざと忘れ物をしたのです。忘れ物が邪魔で座れないようにして、罠の誤作動を防いだのですよ」

淀屋橋駅で見せてもらったショルダーバッグを思い出す。

「わざと忘れられた鞄のおかげで、淀屋橋まで罠が仕掛けられた席には誰も座りませんでした。京橋駅で降りた錦川さんは、2号車14番C席のきっぷを購入し、水間さんに渡しました。発券機では直近5列車までしかきっぷを買えないという話でしたが、時間的に当該のライナーの席は購入できたはずです。他の人が先に購入しないように、予めネット予約で席を押さえ、それをキャンセルしてから発券機で買い直せば邪魔も入りません」

キャンセル情報まで調べなかったのは迂闊だった。警部は一度話を切り、自分用の缶コーヒーを鞄から取り出し、喉を湿らせる。

「ここで注意してほしいのは、錦川さんが罠を仕掛けたのは14番D席、つまり後に松浦さんが座る席だということです」

俺は怪訝な表情を隠せなかった。

「なぜです？　水間さんが座るのは14番C席ですよね、それならD席に罠を仕掛けるはずがないのでは……」

俺はそこまで声に出して気が付いた。

「折り返し作業で座席が回転するから、ですか？」

「その通りです。折り返し作業で座席全体が回転すると、淀屋橋行きの時にD席だった座席は、出町柳行きになるとC席になります。彼女はそう考えて、予めD席に毒針を仕掛けたのですよ。……そして、それが彼女の致命的な誤算でした」

「えっ？」

北条警部は小さくため息をついて、説明を続ける。ライナーはごとごとと鉄橋を渡る。

「甘木刑事、先程の淀屋橋駅での光景を思い返してみてください。折り返し作業はどのように行われていましたか？」

「どのように、ですか。車掌が車内検査をして、ドアを閉めて、座席の向きを変えて……」

「はいそこまで。甘木刑事、よく思い出してください。座席の向きはどうやって変えていましたか？」

俺は目を閉じて記憶を辿る。巡回する車掌、閉まるドア、そしてバタバタと向きが変わる背もたれ。

「背もたれの向きを変えていましたね」

「その通りです。正確には、背もたれの向きだけが変わっていたのですよ。つまり、どういうことですか？」

警部の目がまた俺を見る。俺は頭を絞り、正答を導き出した。

「そうか、座面の位置は入れ替わらないんですね！　背もたれだけが向きを変えて、座席全体が回転するわけではないから」

「そういうことです。つまり、D席の座面に仕掛けられた毒針はそのままD席に残り続けることになります。その席に運悪く腰掛けたのが松浦さんだった、というわけです」

真相を聞き終え、俺は缶コーヒーを空にする。いつになく苦いコーヒーだ。空き缶をテーブルに置こうとして、テーブルが無いことを思い出す。そうか、それも背もたれの向きを変えるために座席背面が無いからなのか。

「物証は探せば出てくるはずです。鞄も毒針も我々の手元にありますし、犯人も分かりました。後は時間の問題です。トリカブトは購入したり育てていたなら話は早いですが、野生のものを手に入れたのかもしれませんね」

いつしか電車はまた地下に入っている。車掌がアナウンスを始める。もうすぐ、松浦さんが生きて到着することのなかった出町柳だ。

錦川が逮捕されたのは翌日の夕方だった。彼女が燃えるゴミとして処分しようとした袋から、トリカブトの葉の残骸やすり潰すのに使われた擂り鉢などが発見されたこと、また指定席のキャンセル履歴が決め手になった。

「動機を聞きましたか、警部？」

警部は二重あごをぷるぷると震わせながら首を横に振った。

「元々理不尽な態度を受け続けて腹が立っていたところに、追い打ちのように彼氏を奪われたらしいですよ。あの二人組が言っていた内容とこのように一致するとは」

それを聞いた北条警部はため息をついた。
「愚かですな、両人とも」
俺は黙って頷き、早めの夕食にする。今日もあんドーナツに缶コーヒーだ。